

佐土原キリスト教会 2021年7月11日礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 20章 1～18節

説教題：主イエスの復活

こんなジョークがあります。「私は、新しい歯科医院で歯医者の名前が記された証明書に気づいた。すると突然、50年前の高校のクラスにいた同姓同名の、背が高くハンサムな男の子のことを思い出した。しかし医者を見るなり、違う人だと思った。顔に刻まれた深いしわ、曲がった腰、この男性がクラスメートにしてはあまりにも老いていたからだ。帰り際に、その昔、地元の高校に通っていたかどうかを尋ねてみた。『そうです』と彼は答えた。『卒業はいつでしたか』。『1950年です』。『とすると、私のクラスにいらしたのですよね？』と彼女は興奮して叫んだ。医者はまじまじと彼女を見つめて言った。『先生は何の教科を教えていらっしゃいましたっけ？』。50年前だと分からないのも無理はないでしょうが、今朝の箇所でマグダラのマリヤは、3日前に亡くなったイエス様が分からなかったとあります。なぜでしょうか。今朝はマリヤの姿を通して御言葉を学びます。

イエス様の墓には、入り口に大きな石の蓋がしてありました。ところがマリヤが行って見たら、すでに石は転がされていたのです。マリヤは2つのことを考えたと思います。1つは「イエス様を十字架に架けた人達が、イエスのお体をどこかに持ち去って甚振っているのではないか」ということ、もう1つは「墓泥棒がイエス様の遺体を盗んで行ったのではないか」ということです。彼女はペテロとヨハネのところを走って行って事の次第を伝えました。ペテロとヨハネも墓にやって来ました。彼らは、イエス様の体を包んでいた布が—(胴体のあったところには胴体用の亜麻布があり、頭があったところには頭が巻かれていた布があつて)—そこから体が抜け出したような状態で置かれているのを見るのです。それでペテロとヨハネは、かつてイエス様が言われた「復活」ということを考え始めるのです。なお8～9節は文の繋がりが悪いように感じます。「リビングバイブル」は「…この有様を見て、イエスが復活なさったことを信じました。この時までには、イエスは必ず復活すると書いてある聖書のことばを、全く理解していなかったのです」(8～9・リビング・バイブル)と訳します。この方が分かり易いと思います。

さて、マリヤは、2人が墓を立ち去った後に墓に戻って来たのかも知れません。彼女には「盗まれた」ということしかありません。彼女は男の弟子達のようにあっさり墓を立ち去ることも出来ず、墓の前で泣いていたのです。マリヤの姿は、何を教えるのでしょうか。3つのことを申し上げます。

1：マリヤは泣いていた…復活の事実

私の持っている高校の世界史の教科書には「復活」についてこう書いてあります。「イエスはエルサレムの郊外で十字架の刑に処せられたが—(紀元30年頃)、まもなく弟子達の間には、イエスは復活したとの信仰が生まれ…。「イエスは復活した」とは書いていない、「イエスは復活したとの信仰が生まれた」とあるのです。これと似た言い方に「イエスは弟子達の心の中に復活した」という言い方があります。イエス様の復活を最も力強く証しするのは、弟子達の変化です。弱虫だった弟子達が、なぜ死をも恐れなくてイエス様のことを宣べ伝えるようになったのか。彼らの変わり様がイエスの復活を証しします。しかし「復活」を認めない人達は「イエスが弟子達の心の中に復活した」という言い方をするので。

遠藤周作が「イエスの生涯」という小説を書いています。彼にとっても、大きな謎は、なぜ弟子達が劇的に変わったのかということです。小説ですから「復活」という奇跡は書けない。だから1つの推理をします。「弟子達は権力者と裏取引をして一切の責任をイエス1人に被せて逃げ延びたのではないか…だから十字架上のイエスの『父よ、彼らをお赦し下さい。彼らは自分が何をしているのか知ら

ないのです』(ルカ 23:34)という赦しの言葉を聞いて、彼らは愕然としたに違いない」と考えるのです。「自分達の卑怯な裏切りに怒りや恨みを持たず、逆に愛を持ってそれに応えることは人間のできることではなかった。少なくとも弟子達は…今日までの人生の中で、そのような人を見たことはない。今日までの人生だけではなく、このユダヤの歴史に出現した王や預言者にもそのような人は一度も出現しなかった。その驚きは弟子達には激しかった」。この衝撃が弟子達を変えたのではないかとします。しかし、彼は正直に書くのです。「弟子達のような弱虫は、自分達を赦してくれたイエスへの感動と思慕を持っていても、そういう心理だけでは…その後半生の生涯をささげ、あらゆる苦難に打ち勝って布教に努めることは出来なかったはずである…時間が経てば感動は色あせ、初めの決意を忘れさせるものだ」。「それだけは弟子達の変化は説明出来ない」と言うのです。彼らは弱い人達だったのです。「良い話を聞こうとする気持ちはあっても、信念は弱く、恐怖のためには自分の先生も犠牲にするような卑怯な性格で、そのくせプライドだけは高い」、そういう、私達と変わらない普通の人達だったのです。その彼らがなぜ、死を恐れずイエスの復活を宣べ伝えて行ったのか。更に説明出来ないのは「十字架で惨たらしく死んだイエスを、なぜ彼らは『神』として崇め、宣べ伝えて行ったのか」ということです。十字架で死ぬ人は沢山いたのです。なぜ、イエスだけが「神」とされたのか。彼らの心にイエス様が甦ったからでしょうか。そんなことではないことをマリヤが教えてくれます。彼女にはそんな余裕は無かった。遺体が盗まれたと言って泣いているのです。

マリヤの姿は何を教えるのか。それは、イエス様の復活が「弟子達の心に甦った」等という中途半端なものではない—(そんな復活なら私達には関係がない。そうではなく)—まぎれもない歴史的事実として起こった、それが弟子達を根底から変えた、ということ教えるのです。それ以外に弟子達の変わり様を、十字架に架けられた男を神とするキリスト教の存在を、説明することは出来ないのです。イエス様は本当に甦られたのです。

2: マリヤはイエスに気づかなかった…生きておられるイエス

墓を覗き込んでいたマリヤは—(天使を見ても事情が分からない、しかし)—背後に足音を聞いたのでしょう、振り返るのです。しかし、それがイエス様だとは分かりません。なぜマリヤは、イエス様が分からなかったのでしょうか。イエス様の方にも、以前とは違うところがあったのでしょうか。しかしマリヤの側の理由が大きかったと思います。マリヤはイエス様を園の管理者だと思い込んで「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります」(15)と言います。彼女はイエス様を、死んで何も出来ない、運び出されれば運び出されたまま、置かれれば置かれたまま、そのような姿でイメージしているのです。そのようなイエス様を探しているのです。彼女は、イエス様を死の世界に探していた。だから、イエス様と言葉を交わしながら、イエス様が側におられるのに、認めることが出来なかったのです。彼女はイエス様を、生きておられる方として探さなければならなかったのです。

イエス様が復活されたのなら、イエスは、今日も生きておられる、皆様のところにもおられるのです。しかし、私達はその事実を受け入れなければ、私達にもそれが分からないのです。死人の中にイエス様を探しても、見つからないのです。しかし、本当に生きておられる方として認めて行く時、私達にも色々な経験を通して、生けるイエス様が分かって来るのです。

森繁さんがご自分の経験を話しておられました。彼は、アメリカで一緒に暮らしたクリスチャン達が祈っているのを見て、「空気に向かって祈って何になるのか」と思っていたのです。「神なんかいない、彼らは洗脳されている」と思って、「聖書の中にバカなことが書いてあるはずだから、それを示して目を覚まして上げよう」と聖書を読み始めたそうです。しかし彼は、逆に御言葉に捉えられ、少し

ずつ心を開いて行くのですが、決定的だったのは「イエス様、あなたがいるのなら、私に分からせて下さい。あなたがいるのなら、私はあなたを知りたいのです」と祈り求めたことだったのです。彼は—(半信半疑だったけれど)—生けるイエスに向かって呼び求めたのです。神は言われます。「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つかるだろう」(エレミヤ 29:12~13)。その通り、彼はイエス様を見出したのです。

「主は今生きておられる、我が内におられる。全ては主の御手に在り、明日も生きよう、主がおられる」という讃美があります。イエス様は生きておられます。生きておられるから、私達の明日を支え、導いて下さるに違いないのです。私達にたとえどんなに恐れや不安があっても、イエス様の恵みと力によって、私達はなおも希望を持って明日に向かうことが出来るのです。

3: マリヤはイエスにすがりついた…復活の希望

イエス様は「マリヤ」と声をかけて下さいました。マリヤは目が開かれた時、「ラボニ」と叫んでイエス様にしがみつきます。そのマリヤにイエス様は言われます。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです」(17)。不思議な言葉です。イエスはこの40日後に昇天されます。父の許、天へ帰って行かれます。昇天したら、もうしがみつけないくなります。昇天前だからしがみつけたのです。どういう意味でしょうか。いやその前に、なぜマリヤはイエス様にしがみついたのでしょうか。「嬉しかったから」。でもそれだけではないでしょう。

聖書は、マリヤはイエス様から7つの悪霊を追い出してもらった、と紹介します。ひどい状態から救い出してもらったのです。それだけにイエス様に頼る思いは強かったでしょう。「イエス様がいなくなってしまうたら私はどうなるのか」、そう思ったのかも知れません。だから「イエス様が帰って来て下さった、もう放しません」ということだったのだと思います。しかしそれは「マリヤは十字架の前のイエス様との関係に戻ろうとした」ということです。しかしイエス様は「そうではないのだ」と言われたのです。「わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい」(17)。この言葉は何を意味しているかということ、神様と弟子達の関係が変わったということ、イエスの父なる神である方が、弟子達の—(私達の)—父なる神になられた」といこと、父が同じだから「兄弟たち」と言われたのです。どういうことかということ、「なぜそうなったのか」、その仕組みは分かりませんが、しかしイエス様の十字架と復活が弟子達を—(イエスを信じる者を)—イエス様と同じ「神の子」にしたのです。ということは、同じ神の子として「イエス様を死から甦らせた力がイエス様の弟子達に—(私達に)—働く」ということです。「イエス様の復活が事実かどうか」、なぜ大事なのか。それは、もし事実なら、私達の復活も事実なのです。かつてイエス様は言われました。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです…」(ヨハネ 11:25)。イエスの復活が事実なら、この言葉も事実なのです。イエス様を復活させた神様は、私達をも復活させることが出来るのです。いや十字架と復活によって、神様が私達の父になって下さったから、父なる神が私達を復活させて下さるのです。クリスチャンは死なない訳ではありません、やはり死にます。しかしクリスチャンは、人が死を通過して行く時、誰にすがれば良いのか、誰が私達を守ってくれるのか、それを知っているのです。そしてイエス様が死を打ち破って甦られたように、クリスチャンは天の御国に甦るのです。私達は、生も死も支配しておられる方に頼って、死の問題を乗り越えることが出来るのです。

しかし、イエス様の復活の力—(希望)—はそれだけではありません。「ケセン語訳聖書」という聖書があるのですが、先程の「わたしは、よみがえりです。いのちです…」(ヨハネ 11:25)、この言葉を「こ

の俺には、人を立ち上がらせる力がある。活き活きと人を生かす力がある」と訳しています。マリヤと弟子達は、絶望のどん底にいたのです。その彼らがイエス様の復活に出会い、その復活が彼らを立ち上がらせて行くのです。それはイエス様が昇天され、もうイエス様を肉の目では見ることが出来なくなった後も変わらないのです。なぜでしょうか。イエスが天に上られ、天から聖霊を送られるから、彼らは、聖霊を通して神の力を直接頂いて生きて行くようになるのです。だからもう肉のイエス様にしがみついても生きていくのも良いのです。

ベサニー・ハミルトンという人の話をして終わります。彼女はプロのサーファーを目指してサーフィンの練習をしている時、左腕をサメに食いちぎられます。片腕でサーフボードを漕ぎながら「神様、助けて下さい、私を浜に着かせて下さい」と祈るのです。「死ぬかも知れない」という思いが頭をよぎりました。それほど傷が酷かったのです。それでも彼女は「私は神様に守られている、イエス様が私を守って下さる」と信じ続けて、そして浜にたどり着くのです。救急車に乗せられ、病院で治療を受け、奇跡的に快復します。しかし、プロのサーファーを目指して努力して来た彼女にとって、片腕がなくなったということは、その夢がズタズタになったように思えたのです。「『なんで私がこんなことに…』と1秒ごとに考えた」と言っています。その彼女を立ち上がらせて行ったのは、信仰であり、神の言葉でした。ある日、クリスチャンの友人が御言葉を伝えてくれたのです。「わたしは、おまえたちのために立てた計画をよく知っている。それは災いではなく祝福を与える計画で、ばら色の将来と希望を約束する」(エレミヤ 29:11・リビング・バイブル)。彼女は神様の励ましを受けるのです。「神様は私の人生に計画をもっていて、それに私のことを愛してくれています。納得がいけないことが起こっても、すべては神様が最初から計画されていたことであり、悪から善を生み出してくださいと信じたのです」。彼女は、神様から、忍耐と、立ち上がる力と、サーフィンに対する新たな情熱を与えられ、片腕のサーファーとして色々な競技会に出場して、素晴らしい成績を上げるようになるのです。しかし彼女は言っています。「イエス様こそ、私にサーフィンをする力や、海に立ち向かう勇気や、サメの恐怖や困難を乗り越える力を与えてくれました。イエス・キリストこそ一番大切です」。

マリヤは、復活の力に生かされて生きるようになったことでしょうか。私達も生けるイエス様を信じる時、生きるにも、死ぬにも、復活の力に与ることが出来るのです。主の復活を信じ、感謝しましょう。